濃尾震誌自序

明治二十四年十月二十八日黎明天靜に風死して小雨霏々たり忽ち災殃濃尾の兩州に降る幾萬の同胞は端なく慘烟苦霧の裡に鎖されたり之を思ひ之を聞きて誰か酸鼻消魂せざるものあらむや我邦古來大震の數頗る多く弘化に安政に其社會に害毒を及ぼすこと啻に一再のみならず有形に無形に其損害は實に非常なるものあり此慘狀より之を言へば大戰爭より最も慘酷なる大難と言ふも過言にあらず而して此大難は之を既往に徵するに將來免かれざるの厄數なれば之が豫防の策を講じて各々其生命財産を保護するは亦是れ吾人最大の要務なりとす

余平時地震の慘毒と其注意の必要を說く然れども弘化安政の大難は既に數十年の昔となりて少壯の人は概ね之を知らず或

は其身此難に遭ひしものも殆と時と共に之を忘る然るに濃尾今回の劇震は實に我邦人をして非常の感觸を與へしむ是に於て乎余は前言を反覆して世人に告ぐるの時なるを信ぜり恰も大垣志士勝沼氏來て當時の慘を語ると共に一書を編成せむことを請ふに會す即ち急に草を起し例を泰西及本邦既往の事歴に求め濃尾今回の震災を叙述して世人の注意を喚起するの材料に供せむが爲め地震の何物たると其害の如何とを載す若夫れ此書果して其責に任ふべきや又其目的を遂ぐるに足るべきや余の知る所にあらず只謹で讀者の判に一任せむのみ余の此書を編成するや岐阜縣屬石川戈足君は公務鞅掌中特に校訂の勞を操られたるは余の第一に謝する所なり又岐阜測候所長井口龍太郎君は當時親く震原を探究し其實歴の結果と其專攷の

學識を以て大に補成の勞を操られたるは亦余の偏に謝する所なり且本書中濃尾地震の如きは多く其慘狀を叙するに止り敢て其他に及ばざるは是れ今日に在ては未だ完く其材料を得ず未定の記事を臆測して讀者を誤らむことを恐るればなり尙ほ其他の記事に至ても未だ悉さゞる所あるべし故に他日之を編する材料と之を要する時運に至らば余は更に增補訂正し以て余の初志を全ふし讀者の希望に副はしめむことを豫期す

明治二十六年三月上澣岐阜に於て

片山逸朗識